

戦後、原爆を意識的契機として生まれた本誌は、若いエネルギーに満ちあふれた文化総合雑誌である。前衛芸術への接近、保守勢力への抵抗、戦後フェミニズムの萌芽……3・11以後、さらに深まる混沌を生きる指標として、戦後思想史・芸術運動史・サークル運動史の解明の資料として復刻！

新しい文学・芸術・社会・生活

希望

エスポワール

復刻版

1948⇒1955

●解説 高良留美子

●巻数 全3巻・別巻1

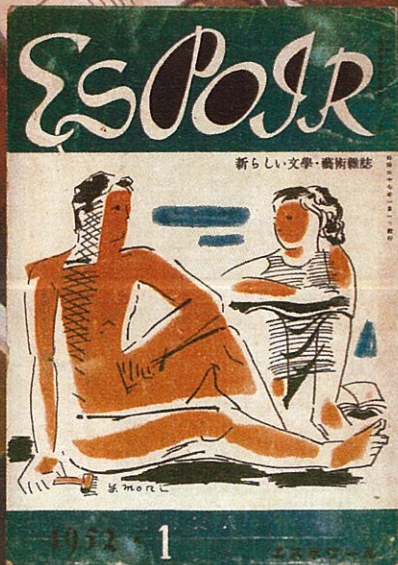
●揃価格 本体96,000円+税

●刊行 2012年11月

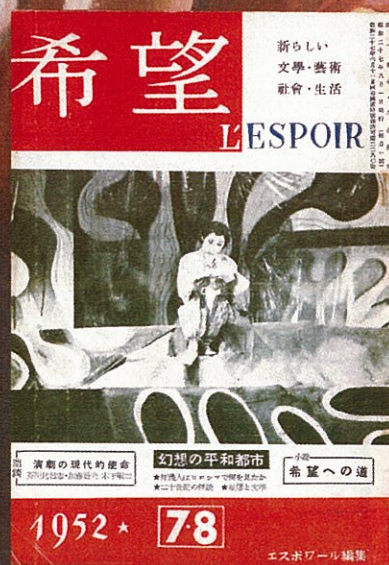
●発行部数

限定70セット

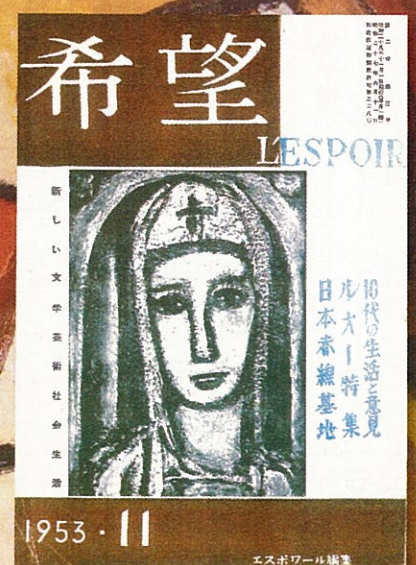
L'ESPOIR



1952年1月号



1952年7・8月合併号



1953年11月号

三人社

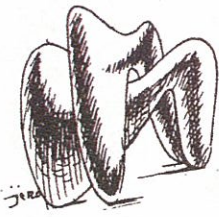
復刻にあたって

本書は、戦後日本におけるサークル運動、前衛芸術運動の全盛期を支えた雑誌『希望』の復刻版である。

『希望』は、一九五二（昭和二七）年一月にエスポワール編集室より創刊され、一九五五（昭和三〇）年七月までに全一一冊が刊行された。編集にあたったのは当時、東京大学学生であった河本英三。発行所も東京大学教養学部の一室におかれ（のちに本郷に移転）、学生を主体として制作された。本誌の出発点となったのは、河本が旧制広島高校時代の一九四八（昭和二三）年に、エスポワール文化サークル総合誌として発刊した同名雑誌であり、全四冊出された。この雑誌は被爆体験者である河本が「原爆を意識的契機」として発刊したとされ、その思潮は本誌にも受け継がれている。

「新しい文学・芸術・社会・生活」を謳った誌面には、不条理な現実に対する抵抗と再生への情熱があふれている。若者が真実を語り合う「共通の広場」として、講演会・座談会・映画会などの文化活動、全国の大学・支部やサークルとの連携を実践し、サークル運動、芸術運動と歩みを同じくしながら、文化運動として生長していく。また、先駆的な取り組みとして、広島・原爆に対する積極的な言及、戦後フェミニズム運動が挙げられる。

内容見本



僕の小説の方法論

安部公房

一、文学のジャンルについての考察
文学を論ずる前に、先ず、そのジャンルについて考えてみよう。文学のジャンルを決定する条件は、社会の中における言語の本質とその機能にある。

言語というものは、パロディによれば、大層皮肉第二系反射で、この機能をもつのは人間だけであり、これは、ただ一組の反射が條件によつて組合さつた特殊反射が、更に組合さつて、一次元複雑になつたものである。人間の意識と思考がそこで作られ、言語は、意識と思考の道具としてではなく、意識の内容そのものとして発生した。道具の使用と平行して、言語の発生は、社会の発生を促進した。言語による意識の発生が、社会生活の複雑化を成し遂げた。ゴッペンカリーが「なぜ、人間は空間を次元として意識するか」の問に答えて、人間が「自己防衛するに當つて、筋肉の運動によつて、三方の動きを仮

設した場合、最も、それが、適合してゐたからである」と云つたように、言語の発生は、これとのアナロジー（類推）と考へることが出来るのである。人間の生理的な条件が、言語の社会的機能を決定するメカニズムになる。言語、すなわち意識の発生は、人間の社会内における条件によつて決定される。

文学とは、言語を使って表現するものである。言語をもつて傳達するもの、それは、その内部に、文学とか、藝術とかを、言語を決定する条件で、決定することになる。大層皮肉第一系から、第二系反射に發展するに同じく法則を内にくみながら著者な道具としての傳達形式は、藝術と云ふ領域を作り出してゐる。色、面、線、等の傳達形式は、藝術の側を、お互に、他をもつておきかへることが出来ない。各々、傳達形式と環境との非絶縁的關係から生じてきてゐると云ふことが、重要である。鶴岡政男の云ふように、人間がもつて傳達した、言語などによつた面制な傳達形式は捨て、何か奇

文学・美術・演劇・映画など各界からも共感をもつて迎えられる。第一線で活躍する、安部公房、加藤周一、佐々木基一、野間宏、花田清輝、武田泰淳、三島由紀夫、長谷川三郎、浜田知明、木下順二、荻昌弘らが、講演会の特集「アヴァンギャルド芸術と現代」（3号）、「国民文学論の総決算」（5号）や、シリーズ「作家との対話」などにおいて、直面する現在のな問題に対し、意欲的に発言した。同時に、無名の若者による創作・評論・生活論・社会批評も多くの誌面をかざった。そのなかには、中山茂、木島始、小海永二、中田耕治、福田善之、高良留美子、竹内康宏といった、『希望』以降も活躍を続ける人々があり、その清新な姿を見ることが出来る。

学生主体でありながら、これほど総合的な芸術雑誌にまで発展した雑誌は稀有であったが、その存在を知る人が少ないこと、通覧可能な機関がなかったことから、広範な人の眼に触れる機会はいわゆる乏しいものだった。

今回の復刻にあたり、とくに入手困難であった広島発行の前身誌を別巻に収録した。近年再考されつつある、一九五〇年代の戦後思想史・芸術運動史・サークル運動史の一側面を解明する資料として、文学研究者、社会運動研究者に向けて提供する次第である。



ESPOIR 一九五二年 目次

朝妻治郎・麻生三郎・井上長三郎
柚手春三・末松正樹・立石鉄臣・
美術構成 勅使河原宏・鶴岡政男・森 芳雄

われわれの主題は何か マニフェスト

アヴァンギャルド芸術と現代

文学 アヴァンギャルド文学の課題……………安部公房……………

轉換期の文学……………佐々木基一……………

五・一事件とアルベール・カミュ……………矢内原伊作……………

作家の自由……………椎名麟三……………

この今のこの文学……………白井健三……………

映画 映画に表われたレジスタンス……………大島辰雄……………

美術 貧しさの中から……………鶴岡政男……………



作家との対話
三島由紀夫
理知的な野獣性

記者 僕らの間でやりました先の座談会で三島さんの作品が非常に問題になっていて、その中で三島 僕の小説は酒のさかになり易いから、問題になっているというは多分、悪口をいわれているということになるんだろな。さつぷり頂いた舞踏で雅名さんのみたくらぶこと外作家のインスピレーションは、僕の場合はあまりうまく話せないけど、むしろ御座るな。

記者 三島さんの作品読んで特に感じられるのはドラマといえますか、意識的にドラマチックな要素をいれようとしておられるという感じがするんですが、どうでしょう。三島 うん、そのドラマってね、僕は子供の頃から木が好きだった。だからそれから建築なんか好きだったけれど、あの木がね、焼くも煮るも重くても、行くくても、あれが壊れても壊れても、それからその上に



青空は死んでしまった

河本 英 三

豊かに茂ったブタナスの蔭にボッタスが見つかつた。その蔭の落ちた歩道に自轉車をおいて汗をふく。ボッタスには人がいる。「早く出てくれればいいが」視線が、中に入っている人にゆくまで、その箱に塗つた黄色に止る。黄黄、黄黄、つづくに太陽が照りつけている。眼裏は、ぼつと欲がる黄色にくるめく。青い影と、緑の葉が、すうすうと送る。胸がむかづいて、熱い塊が、むうーと喉にこみ上げる。一とき、風も、はたき、止む。——それから、あたたきつけるような風、熱風……疼痛がこめかみからぼんぼんくはへ走る……身体がたおれ……が、その前に、さつと、緑の葉が視界にはたいた。



モスクワ通信 高良とみ

- ビエール・エルヴェの『マルキシスト的人間』を読む (四) 白井健三郎 (一〇)
- 希望 母への手紙……………三島克巳 (一〇)
- 恋人への手紙……………木田律子 (一〇)
- 貴方が二十代なら何をするか?

赤松俊子・浅沼稻次郎・安部能成・石井漢石黒清・内田巖・太田洋子・小松清・岡部三郎・本郷新・なかのしはげる・宮城音彌

幻想の平和都市

- ヒロシマで知識人は何を見たか……………(一〇)
- 佐藤春夫・小松清・赤松俊子・窪川鶴次郎・佐々木基一・奈良本辰也・壺井繁治・藤島宇内・山代巴・細田民樹……………(一〇)
- 二十世紀の怪談……………金井利博……………(一〇)
- 原爆と文学——被害者の立場から——落藤久生……………(一〇)

作家との対話——野間宏——真空地帯に至るまで……………(一〇)

二十代の文明時評 獨立の衣裳……………(一〇)

CRITIC

- 「祖国喪失」「蛙昇天」「平和のための美術展」——寫真家は皆めつちからか……………高良留美子他 (一〇)
- バツク・スクーリン ベルリン物語……………(一〇)
- 葉書書評 ロンジュンアイヤン「よい足よい眼」ルーマー「ゴッタン」河野間宏「雪の下の方か……」おたづみ会編「日本の愚子遊」……………(一〇)

希望への道 窪 英夫 (一〇)

演劇の現代的使命 芥川比呂志 加藤道夫 木下順二……………(一〇)

編集室より「蛙昇天」第五景 山本安英 グラビア……………最近の中国……………(一〇)

『希望』の復刻を喜ぶ

岩橋邦枝（作家）

あの時代の熱気が甦る。

『希望』という雑誌を私が初めて知ったのは、一九五三年（昭和二十八年）春にお茶の水女子大学に進学して寮生活をはじめた年だ。冬休みに帰省する前だった。読書好きで話の合う寮の同年の友人に、『希望』に新年から参加しようと言われた。彼女の説明を聞き雑誌の目次を見て、私はすぐさま誘いに応じた。学内の文学サークルは樋口一葉や隅外がテキストで、新風を期待して入った私にはつまらなかつた。

『希望』の会合に初めて出席した日、学生を中心にした人たちの論じあう内容が私にはむづかしくて、ついていけなかつた。みそつかず、という意識がその後も抜けなかつたが、熱っぽい会合の論議や、気鋭の戦後作家を囲む座談会を隅っこで食るように聴き、雑誌『希望』を熟読した。野間宏、安部公房、木下順二……みんな三十代の若さだった。私は、知的好奇心が活発で、吸収力が漲っていた年頃だ。『希望』の文学・芸術運動は、私に新しい目ざめを促し文学的感受性を育ててくれた。一緒に参加した友人川口澄子は、半年後と翌年の終刊号の『希望』に詩を発表し、同時期に私の初めて書いた小説が文芸誌に掲載された。野間宏氏が読んで激励してくださった。

雑誌『希望』は、戦後の昭和二十年代の、若い世代の知性と熱情が誌面にみちている。貴重な、生きていく記録だ。あの時代の、未来への希望をかけた文化運動に具体的に立ち会い、生き生きとしたエネルギーを実感できる。



1954年1月号



1954年6月号



1954年9月号



1955年7月号

三つの運動のミッシングリンク

鳥羽耕史（早稲田大学文学学術院教授）

一九四八年一月に創刊された『エスポワール』広島版は、「広高、文理大、女専」などの若いメンバーで構成されたエスポワール文化サークルの雑誌であり、戦後サークル運動の勢いを伝える。一九五二年一月、占領末期の『希望』東京版創刊号の目次や、巻末に掲げられたスタッフ・ライターは、ほとんど〈夜の会〉や〈総合文化協会〉など、花田清輝と岡本太郎が戦後にはじめた芸術運動の人脈から構成されているように見える。それが独立後の六月に刊行された二号で学生の座談会を掲載したところから早くも変化をはじめ、翌年八月の五号で「国民文学論の総決算」を特集する頃には、すっかりサークルの雑誌の様相を呈している。

戦後サークル運動に端を発し、戦後芸術運動から一九五〇年代サークル運動への転換を鮮やかに示すこの雑誌は、しかしこれまでほとんど幻の存在だった。東京版すらごく限られた機関にしか所蔵されず、まして広島版はほとんど通覧不可能だった。今回の復刻で初めて明かされる全貌は、単に一つの雑誌の流れを示すのみならず、これまで別々に捉えられてきた三つの運動をつなぐミッシングリンクを提示するものとなるだろう。全集未収録の安部公房へのインタビューを含む「作家との対話」シリーズや、『近代の超克』を思わせる「共同研究座談会」「世代を結ぶ知的協力会議」など意欲的な編集の成果は、六〇年を経た現代に多くの発見をもたらすはずだ。

一九五〇年代の奥行きを示す

成田龍一（日本女子大学人間社会学部教授）

「戦後」の再検証が、さまざまな次元でなされている。焦点のひとつは、いうまでもなく一九五〇年代であり、サークル運動である。一九四五年を規準とする戦後史像を相対化する視点をここに定めるのだが、中央／地域、論壇／運動、プロの作家／アマチュアの書き手などの対比が念頭に置かれてもいた。しかし、ここに復刻される『希望』は、いっけん対立的な双方の要素をあわせもち、重要な位置を占める。

『希望』の出発は、広島高校など、学生たちの「ESP文化サークル総合誌」であり、一九四八年一月に創刊された。群馬、札幌、岡山などに支部（支局）を有したが、一九五二年一月に東京に本拠を移し、東京大学を中心としつつ、他の大学および支部と連携をとる体制となる。あわせて、「スタッフ・ライター」として、加藤周一、安部公房、野間宏、木下順二、花田清輝といった作家・評論家が顔を並べており、さまざまな対立する境界をまたぎ越していくのである。

主張内容も、同様である。東京版の第二号（一九五二年六月）に掲げられた「希望 提唱」は、「現実がわれわれをさいなんでいる」と書き始められ、「共通の広場」を求め、文学・芸術による「表現」を「抑圧され虐待された自己の現実」の宣言であり、抵抗である」とし、「世代を越えた良心」を求め、「階級と立場を越えた良心の扉」を開くとする。女性の観点をはっきりと打ち出してもいる。

一九五〇年代サークル運動の奥行きが、『希望』によりうかがうことができるとともに、一九四五年を画期とする思考との重なりをあわせて読み取ることができる。得難い雑誌の復刻を喜びたい。



1952年6月号



1952年11月号



1953年8月号



1953年10月号

混沌たる現代の指標に

渡辺澄子（大東文化大学名誉教授）

一九四八年、原爆で廃墟とされまだ復興が軌道に乗っていないかった広島で、私たちの先輩に当たる学生たちが中心となって『ESP O I R』が創刊されていたとは！その事実を少しも知らずに、東大正門から少し行つたところにあった喫茶店『南米』（？）で開かれていたエスポワールの会に学生だった私はよく出かけていた。小海永二さんがいつもいた。ときどきお近くにお住まいの木下順二さんが見えた。滅多にお顔をみせることはなかったが、山本安英さんがひよっこお見えになることがあり、あつ、『夕鶴』の「つう」と興奮したことを思い出す。

熱い政治の季節だった。「新聞部」に所属し編集長に推された私が載せた、論旨に感動した文章の書き手が共産党員だったらしく学長の忌諱に触れ、これが原因となつて、大学創立以来といわれる学生運動に発展した頃だった。エスポワールの会に通つたのは「何でも知りたい」「広く生きたい」意欲が旺盛だったからだだった。この雑誌には、その後の一時期交流を持ち、あるいは教示を得た方々、例えば安部公房、佐々木基一、中村真一郎、野間宏、山下肇、佐藤春夫、窪川鶴次郎、壺井繁治、藤島宇内その他、懐かしい顔が並んでいる。皆さん、時代にコミットし、人生に相渉つた方々だ。腐敗、閉塞感の限りなく増幅している今、この方たちの声を聞ける機を得た事の意味は極めて大きい。広島版は是非読みたい。

エスポワール！ ここから立ちのぼる先人の賢言を噛みしめ、指標とすることで、希望の持てる社会再生に漕ぎだしたい。漕ぎ出さねばならぬ。

希望、提唱

「共通の廣場」は出來つつある

現實がわれわれをさいなんでいる。フアッシュヨ的政治権力の下で、われわれは分裂を非人間化を強要される。人間は道具になつて、スピーカーになつたり獸になつたり弾丸になつたりする。が、われわれは人間だ！人間であろうとする凡ゆる階級、凡ゆる職域の者が集つて、眞實を語り合いそれを表現し人間の苦惱をうたえる「共通の廣場」がわれわれには必要なのだ。

文學・藝術はもはや單なる趣味や學問ではない。「現代に生きる者の率直な表現」それがわれわれの文學である。軍國主義の復活、第三次世界大戦の不安、古い封建道徳・因襲の横行、これら外からくる暴力にわれわれは抗議したい。表現とは何よりも「抑壓され虐待された自己の現實」の宣言であり、抵抗である。

それに、われわれをかかゝる状況に導いた大人への不信は今も拭われない。とすれば、われわれの文學は、戦後の若い世代にとつて、誰もが持つてゐる共通のテーマである。が更に、この現實は世代を問はず襲いかかつてゐる。提携が必要だ。世代を越えた良心が「希望」誌に結ばれつつある。今ここには、新しい時代を生きる者を中心とする眞の「共通の廣場」がつくられつつある。そして今や、廣島で原爆を意識的楔機として誕生し、五年にわたつて模索し問いかけ試み、その間共鳴する人々の期待、支持する人々の希望を糧として育つた「希望」誌は、階級と立場を越えた良心の扉をひらきつつある。

ここに參加するものの紐帯は一つの絶対な知性的な公正である。われわれはかくあるところのものを云う。それだけのことだ。かく知るところのものを云う、それだけのことである。あらゆる形態に於ける虚偽を窮追する。政治上の虚偽と文學上の虚偽と、偽りの唯美主義とデマゴギーを窮追する。この追撃に於いては、閑歴に關する顧慮により、黙契と連累を意味するあの尊敬の成心により手加減するようなことは斷じてしない。唯、眞實と創造に對して謙虚になるのみである。それは單なる文學的試みではない。かくて「希望」は、我々の中に芽ぐむ新しい思想、新しい藝術に表現の場を興えて、その温床となるばかりでなく、歴史に於ける處女たるわれわれの、不條理な現代に對する純粹な抵抗の跡を刻んでゆくであろう。これが同時に、あらゆる藝術のジャンルにとつても共通の批判を通じた、現代の藝術創造に於ける「共通の廣場」ともなる。又、平和擁護の牙城もそこに見出されるであろう。われわれはそれに向つて更に努力する。が、それはもはや貴方々にとつても、誰かが何處かでやつてゐることではない。それは貴方々自身につながつてゐる。新しい世代たる貴方、新しい時代の未來を自らの未來としてゐる貴方に。

かくて、生れ、生長する「希望」は、日本のあらゆる人々の希望、世界の人々の希望につながつてのびてゆくであろう。

共通の廣場で、事態はすでに進行してゐる。

全國エスPOWERル文化サークル所在地

- | | |
|-----|--------------------------------------|
| 東京 | 東大、芸大、慶応、早稲田、工大、上智大、(連絡はエスPOWERル社宛付) |
| 北海道 | 札幌市南15西6 千葉宣一 |
| 秋田 | 大館市大町菊地忠三 熊谷榮一 |
| 群馬 | 新田郡藪塚本町字台 小林幸雄方 |
| 長野 | 上田市錦町 築谷義明 |
| 名古屋 | 名古屋大学内(設立中) 小崎軍司 |
| 静岡 | 三島市三ノ六三五 加藤政敏 |
| 近畿 | 京都大学、大阪大学内(設立中) 安藤勝章 |
| 岡山 | 久米郡大井西村大字坪井 秋月静枝 |
| 四国 | 新居浜市東須賀五五 野村隆章 |
| 九州 | 福岡市三宅西次橋矢野宅 磯崎民子 |
| 大分 | 大分市新桜町 落藤久生 |
| 廣島 | 廣島市塚本町六二 |

通信のつぼみ

エスPOWERル文化サークル編輯
東京新聞文芸部協働刊行
NO. 1
1952.9.1 一冊100円
エスPOWERル社

現代文学の方向

文芸講演會
廣島支局

不條理の認識は出発点

堀田 善衛氏

八月五日(土)午後七時、廣島市塚本町六二番地エスPOWERル文化サークル會堂にて、文芸講演會「現代文学の方向」が開催された。講演者は、東京新聞文芸部編輯の堀田善衛氏である。講演は、まず「現代文学の方向」として、戦後文学の現状を概観し、その中で「不條理の認識は出発点」として、戦後文学の重要な特徴を指摘された。堀田氏は、戦後文学は、戦前の文学とは異なり、社会や政治の外部からではなく、人間の内面から生じたものであると述べ、その代表として、川端康成、三島由紀夫、大江健三郎、村上春樹などの作家を挙げ、その作品を分析した。また、戦後文学の発展には、作家の個性と、読者の成熟が不可欠であると述べ、今後の文学の方向性について、読者の成熟を促すことが重要であると述べた。

文学共和国から文学民主國へ

- | | |
|-----|--------------------------------------|
| 東京 | 東大、芸大、慶応、早稲田、工大、上智大、(連絡はエスPOWERル社宛付) |
| 北海道 | 札幌市南15西6 千葉宣一 |
| 秋田 | 大館市大町菊地忠三 熊谷榮一 |
| 群馬 | 新田郡藪塚本町字台 小林幸雄方 |
| 長野 | 上田市錦町 築谷義明 |
| 名古屋 | 名古屋大学内(設立中) 小崎軍司 |
| 静岡 | 三島市三ノ六三五 加藤政敏 |
| 近畿 | 京都大学、大阪大学内(設立中) 安藤勝章 |
| 岡山 | 久米郡大井西村大字坪井 秋月静枝 |
| 四国 | 新居浜市東須賀五五 野村隆章 |
| 九州 | 福岡市三宅西次橋矢野宅 磯崎民子 |
| 大分 | 大分市新桜町 落藤久生 |
| 廣島 | 廣島市塚本町六二 |

希望 L'ESPOIR

文化と平和を愛し
明日への希望を創
つて行く文化綜合誌

小説
アメリカのわだつみの塵
死んだ水兵は知のてい
ラス・ミラー 高良留美子訳
希望への道 (100枚) 竹内麻広
新連載
死神がぼくを見舞っている
河本英三
シンポジウム

国民文学論の総決算
竹内好・高橋武夫・中島健蔵・辻村由紀
新島繁・野田原・安部公房・平田次三郎

若い美術家に何を期待するか
小山田二郎・横口録池・森河操・吉井忠
浜田知照・林武・村井至誠・吉森留守介
藤井哲郎・岡本謙次郎・藤田健郎

詩人と現実
T. S. エリオットの現実 小田島雄平
高次賢治の現実 小川 淳郎

戯曲
富士山麓 東大合同演劇団共同創作
早大自由演劇団共同創作

8月号 170頁 美装 100円 新人公募集中
東京都文京区駒込通分 17
電話(東京) 1504-67

新しい時代の文学・芸術創造、
益り上りの、ある国民的表現意欲に、
其通の広場を与える唯一の誌開始して成る。
全国同人誌・サークル誌の精選された作品、
きびしい現実と対決しているうちから生み
出される知性・抒情・浪漫の結晶。



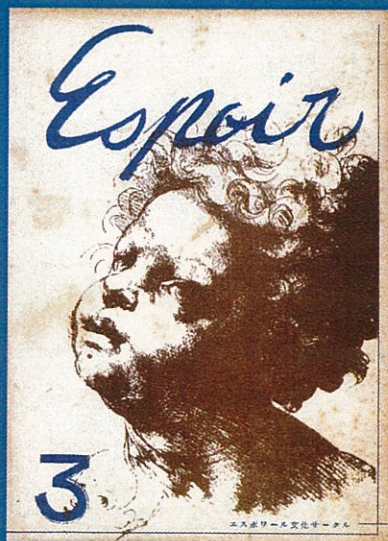
増部増頁断行
ESPOIR

別巻	第3巻	第2巻	第1巻	復刻版巻数
解説十総目次十執筆者索引	広島版1号(1948年11月15日)〜4号(1951年6月25日)	8号(1954年1月1日)〜11号(1955年7月1日)	5号(1953年8月1日)〜7号(1953年11月1日)	1号(1952年1月1日)〜4号(1952年11月1日)
				収録原本(号数は通号で表示しています)

ESPOIR 希望 L'ESPOIR

復刻版概要

- 巻数 全3巻・別巻1
- 体裁 A5判・上製・総約1、820頁
- 解説 高良留美子(詩人)
- 挿価格 本体96、000円+税
- 刊行 2012年11月
- ISBN 978-4-906943-04-3C
- 推薦 岩橋邦枝(作家)
- 鳥羽耕史(早稲田大学文学学術院教授)
- 成田龍一(日本女子大学人間社会学部教授)
- 渡邊澄子(大東文化大学名誉教授)



0000年0月号

窪田 啓作	窪川 鶴次郎	串田 孫一	木下 順二	木島 始	川本 順	河本 英三	加藤 周一	桂川 寛	梶山 季之	小田島 雄志	尾崎 正治	荻 昌弘	大島 辰雄	井上長 三郎	石母田 正	荒 正人	安部 真知	阿部 知二	安部 公房	芥川 比呂志
中野 重治	中蘭 英助	十返 千鶴子	鶴岡 政男	武谷 三男	武田 泰淳	竹内 好	竹内 康宏	園部 三郎	白井健 三郎	椎名 麟三	佐々木 基一	小松 清	小林 謙一	小海 永二	高良留美子	高良真木子	高良 とみ	桑原 武夫	黒羽 英二	栗原 貞子
吉井 忠	矢内原 忠雄	森 芳雄	村上 光彦	宮城 音弥	三島由 紀夫	丸山 真男	堀田 善衛	広津 和郎	日野 啓三	原 誠	浜田 知明	花田 清輝	野間 宏	西野 壽二	奈良本 辰也	中山 茂	中村 真一郎			

主要執筆者一覧

三人社

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
振替*****

●表示はすべて税別

※図書館様・書店様へ

小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。